

出口治明学長が語る

人生が楽しくなる

世界の名画150

出口治明

人生を豊かにする
珠玉の西洋絵画

稀代の**教養人・出口治明**が
世界の美術館から選りすぐった
150枚がこの一冊に!

「美術は僕のような怠け者に向いている趣味だと思います。美術館に行って好きな絵を見ればいいだけですから」 (「あとがき」より)



星海社

281

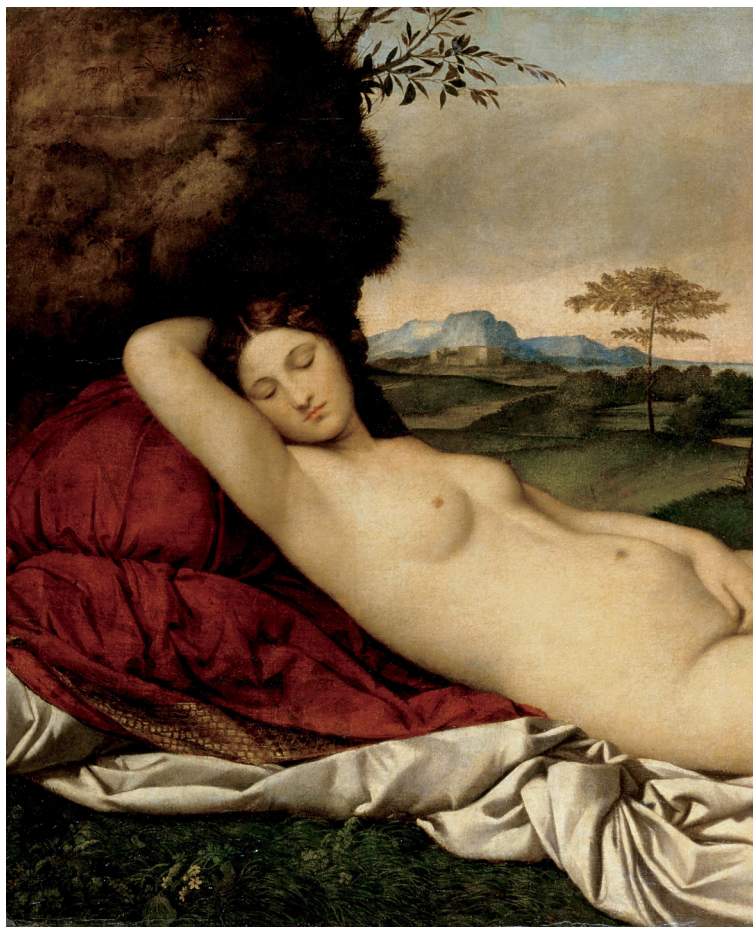


出口治明学長が語る

人生が楽しくなる世界の名画150

出口治明





ジョルジョーネ『眠れるヴィーナス』

はじめに

「あなたは何をしている人なんですか？」

少し怪訝けげんそうな表情で尋ねられました。

「いや、普通のビジネスマンですよ」

「それにしてもしょっちゅう来ていますよね」

「絵が好きなんです」

簡単に自己紹介をし、雑談をしていると、とくにどんな絵が好きなのかを訊きかれました。

「クアトロチェント（15世紀）のイタリア絵画が一番ですね」

「ああ、そうですね。それならうちの理事長と話が合うでしょう。今度ランチでもいかがですか？」

「え、本当ですか？　ありがとうございます。喜んで」

ロンドン・ナショナル・ギャラリーでの出来事です。

僕は1992年から1995年まで、日本生命ロンドン現地法人の社長を務めていました。その間、ナショナル・ギャラリーに通い詰めすぎてスタッフの方に顔を覚えられ、ある日ついに声をかけられたのです。絵描きやその卵なら模写するための道具を持ってきて連日通うこともあります。画家でも研究者でも観光客でもなさそうな東洋人の中年男性が、手ぶらで何日も何日もやってきては館内をうろうろしていたので「なんやこいつ」と思われたのでしょうか。

僕がロンドンで働いていたときのナショナル・ギャラリーのトップは、著名な投資銀行を経営していたベアリング家の当主でした。ベアリング家がかつてロスチャイルド家と世界を二分した巨大金融財閥で、ベアリングス銀行はイギリス王室とつながりが深いことから「女王陛下の銀行」とも称された名門投資銀行でした（1995年に破綻してしまいました）。彼はバンカーでありながら芸術への造詣が深く、だからナショナル・ギャラリーの理事長に長い間、就いていたのです。そんな方から、個人的にレオナルド・ダ・ヴィンチをはじめ、イタリア・ルネサンス絵画についてのお話をうかがうことができました。あまりに話が盛り上がり、お邪魔することになったのはご愛敬あいきょうです。

この本では、そんな無類の絵画好きである僕が、西洋美術の名画の好きなところを語っていききたいと思います。扱うのはヨーロッパの五大美術館——パリのルーヴル美術館、ロンドンのナショナル・ギャラリー、フィレンツェのウフィツィ美術館、マドリッドのプラド美術館、ウィーンの美術史美術館——に収蔵された作品を中心に、ヨーロッパの中世末期から近代初期までの絵画についてお話ししようと思います。

これまでの僕の本の読者には、歴史に興味があったり、教養を身に付けたいと思っておられたりする方が多いように感じています。そういう方はもちろん、初めて僕の本を手にとってくださった方にも、絵の楽しさを知ってもらえたら嬉しいと思っています。「西洋絵画の見方がわからない」とか「有名な絵の背景を知りたい」、はたまた「ヨーロッパ旅行の際に美術館に行くつもりだからちょっと調べておこうか」という人には、多少お役に立てるかもしれません。でも一番伝えたいのは「絵を見るのは楽しい」ということです。その楽しさをみなさんと共有したいのです。

僕は本職の絵の研究者ではなく、旅好き、歴史好き、美術好きが昂こぶじて本を書いているにすぎません。みなさんにも構えず、気楽に読んでいただければ幸いです。

芸術鑑賞は究極を言えば「好み」だと思います。たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチ、

ミケランジェロ・ブオナローティ、ラファエロ・サンツィオはしばしば「ルネサンスの三大巨匠」と言われます。しかし僕は、ミケランジェロの偉大さはわかるものの、彫刻家であつた彼が、絵画でも筋骨隆々きんこつりゅうりゅうの人物造形にしてしまうとこころが好きではありません。

僕はいつも「物事を判断する際には『数字・ファクト・ロジック』が重要だ」と言っているのですが、好き嫌いの世界の話は別です。もちろん、それまで知らなかった見方や制作背景を知ることと同じ絵がまったく違って見えてくることもありませう。でも一方で、他の人にくら「この絵はすごいんですよ」と説得材料を並べ立てられたところで「私はこの絵は好きになれない」と思うことも当然あるはずですよ。ですから僕の見方に対して「この人とは趣味が合わんな」と思う方もいるでしょう。ミスマッチを避けるためにも、先に僕の好みをお伝えしておきたいと思ひます。

僕のヨーロッパ美術との出会いは、十代のはじめです。最初に心を惹かれたのはルーヴル美術館にあるサンドロ・ボッティチェッリの『ヴィーナスと三美神から贈物を受ける女性』(86ページ)でした。ほとんど初恋と言つていいほどです。ただこのときは、まだ現地に行つて実物に触れたわけではなく、画集で見ただけでした。

僕は「人間は『人・本・旅』からしか学べない」と常々語っています。社会人になってからは最低でも年に一度は海外に出かけ、さまざまな土地でたくさんさんの絵を観ました。ヨーロッパ各地をもっとも旅していたのは、冒頭に申し上げたロンドン勤務時代の約3年間です。

当時の僕は、休みともなれば早朝に出発しては翌日の深夜に帰宅するという弾丸旅行で、パリのルーヴル美術館やフィレンツェのウフィツィ美術館などに何十回もおもむきました。当時の僕の仕事はヨーロッパで2000億円規模の円ローンを貸し付けたり、500億円規模のファンドを運用したりすることでしたが、フランスやドイツは部下に任せ（パリやフランクフルトに事務所がありました）、主に北欧や南欧を担当していました。フィンランド政府やスウェーデンの会社、それからバルセロナ市がクライアントでしたから、出張の前後に各地の美術館へ通いました。ミラノ出張も多く、イタリアへもよく行きました。旅の時間のうち、2割から3割は美術館にいたような気がします。

僕はヨーロッパの美術が好きで、なかでももっぱら絵を見るのが好きでした。その理由は、きれいな女の人描かれているからです。絵に描かれた理想的な女性の姿を観るために、あちこち巡っていたのです。

ところが、はじめのうちはそうだったのですが、きれいな女性を観るついでに目に入っ
たおもしろい姿の女性や天使、それから歴史上の有名な人物の肖像画などにも興味が広が
っていきました。「この絵にはこういう意味がある」といった解釈が定まっていけない謎めい
た絵画も好きで、気に入った作品の前で何十分も過ごすことも珍しくありませんでした。

僕の絵の見方はきわめてシンプルで、「好きな人に会いに行く」というものです。

人物画、なかでも14世紀に始まるルネサンスから19世紀初頭の新古典主義、ロマン派ま
でのあいだに描かれた「人の絵」が好きなのです。なぜならそのあいだが、ヨーロッパ美
術が「理想的な人物像」を追求していた時代だと思うからです。

それよりも前のゴシックやロマネスクの絵画は、古代ギリシア・ローマにあつた遠近法
の手法や八頭身の身体を理想とする価値観などが失われていた時代ですから、画面が平面
的、かつ人物造形もおごそかに過ぎて、それほど好みではありません。

日本では19世紀後半に登場してきたモネやルノワールなどの印象派、あるいはそれ以降
の20世紀フランスの絵画の人氣が高いですよね。印象派や写実画、キュビズムが好きな人
には申し訳ないのですが、僕には写真が出てきて以降、絵画がつまらなくなつたように感
じます。ある面では写真に取って代わられてしまい、ある面では「写真にはできないこと

をする」という画家たちの意識が、逆にそれ以前の絵画の良さを失わせてしまったのではないか。写真は瞬間を切り取った美しさはありますが、どれだけすばらしくとも、それは理想美ではないわけです。僕は写真や、現実を写し取った写真画よりも、ルネサンス絵画のほうが理想を描けている気がします。

もちろんルネサンスから新古典主義の間の前にも後にも、歴史的に重要な作品はたくさんあります。けれども、フランスの新古典主義絵画を代表する、ルーヴル美術館所蔵のナポレオンの戴冠式を描いた巨大なジャック・ルイ・ダヴィッドの作品（194ページ）をもつて、ヨーロッパの絵の時代は終わったという気がします。あれが理想を描いていた時代の終わりだと、僕には思えるのです。

そういう価値観の人間ですから、先ほど挙げた「五大美術館」の中には、印象派以降を集めたフランスのオルセー美術館や現代美術が展示されているポンピドゥ・センター、あるいはアメリカのメトロポリタン美術館やニューヨーク近代美術館（MOMA）などは入っていません。

この本は、ヨーロッパの主に中世後半から近代初期までにかけての「人の絵」が好きな

人間の話だと思って読んでください。もちろん、たとえばルネサンス期のヴェネツィア派の画家ジョルジョーネが始めた「眠れるヴィーナス」の構図は、近代の画家であるマネやピカソなどにまで連綿と参照され続けています。ですから近現代の美術が好きな人も、この時代の絵のことがわかると、これまで以上に美術鑑賞の楽しさが増すはずです。

それでは「好きな人に会いに行く」絵画を巡る旅にお付き合いください。

立命館アジア太平洋大学（APU）学長 出口治明

目次

はじめに 4

第一章 肖像画 15

第二章

ピエロ・デラ・フランチェスカ、ボッティチェッリ、
レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ジョルジョーネ

53

第三章 ヨハネス・フェルメール 131

第四章 パリ ルーヴル美術館 149

第五章 ロンドン ナショナル・ギャラリー 197

第六章 ファイレンツェ ウフィツィ美術館 239

第七章 スペイン プラド美術館 261

第八章 ウイーン 美術史美術館 295

第九章 その他の美術館 319

第十章 好きな画家のこの一点 379

おわりに 388

主要参考文献 392

第一章

肖像画

「好きな人に会いに行く」というのが僕の絵の見方のベースです。まずは肖像画についてお話しましょう。

横顔肖像画（プロフィール）

僕は真横を向いた顔の絵（「プロフィール」と呼ばれます）、とくに女性の横顔の絵が好きなのです。それについて順次見ていきましょう。

『ジャン2世の肖像画』は女性ではなく男性の横向き肖像画ですが、歴史的に見ても大事な作品です。現存するものでは最古、ヨーロッパで古代以来初めて宗教画から独立してプロフィール（横顔）が描かれた肖像画と言われていて、14世紀フランスで描かれたものは現存する唯一の板絵でもあります。

僕が気に入っているのは、顔が凜々しいところです。古い絵ですけれども、髪の毛やヒゲの描写が写実的で、言われなければ古い絵ということがわからないでしょう。親しみが



作者不詳『ジャン2世の肖像画』Jean II le Bon (1350年頃) ルーヴル美術館

4世紀末にキリスト教がローマ帝国の国教となって以来、絵画の中心は聖書の世界を描くこととなって個人の肖像画は廃れていたが、中世末期に再び注目され始める。本作は1356年にボワティエの戦いで英国軍に敗れたフランス国王ジャン2世(在位1350年~1364年)が、ロンドンで4年間の幽囚生活中に宮廷画家によって描かれたという説がある。



ジャン・フーケ Jean-Fouquet (1415年または1420年頃～1478年または1481年頃)『シャルル7世の肖像』(1450年頃) ルーヴル美術館

湧く絵です。たとえばこれの100年ほどあとにフランスの画家ジャン・フーケが描いた国王シャルル7世（在位1422年〜1461年）の肖像画と見比べてみてください。そちらのほうが少し不自然に感じるくらいです。それだけこの作品が先進的で、優れているということですね。

次のページの『ジネヴラ・デステの肖像』もルーヴルにある絵です。当時ピサネロに肖像メダルを作ってもらったことが社会的地位の象徴となっただけで、素描とメダル肖像は数多く残っているのですが、真作で残っているピサネロの横顔肖像画は珍しいものです。

このように女性が良い服を着て、豪華なアクセサリーを身につけ、髪にも気合いを入れて横向きの肖像画は、いわば貴族の見合い写真です。当時、写真はありませんから、見合い相手に対して肖像画を贈ったのです。それも「どうだ、俺の娘はきれいだろう、参ったか」と嫁ぐ先の家に見せつけ、主張するために、たくさんのお金を費やして独特のファッションに着飾らせた上で、腕利きの画家に描かせていました。多くの場合、彼女たちが日常的にこんな服装をしていたわけではないと思います。たとえばパリ・コレクションで一流のファッションモデルが尖った衣装でランウェイを歩くようなもので、この髪型



ピサネロ Pisanello (1395年頃～1455年頃)『ジネヴラ・デステの肖像』Ginevra d'Este (1438年頃)
ルーヴル美術館

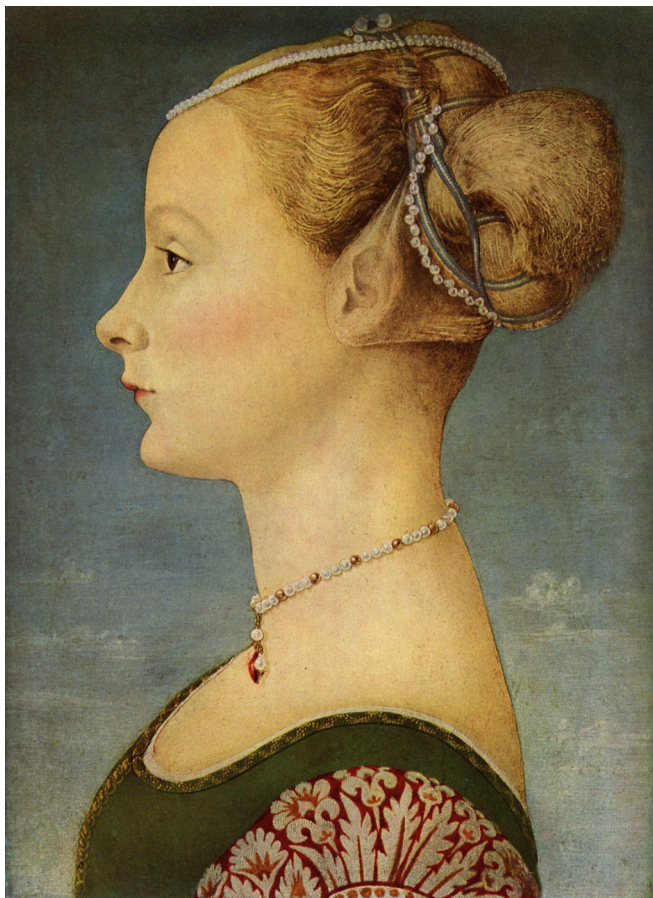
ピサネロは15世紀にイタリア各地で活躍し、宗教画や記念メダルの肖像、素描で人気を博す(横向きの絵画自体は古代ギリシアやローマの貨幣以来の伝統)。本作のモデルについては諸説あるが、14、5歳で嫁いだ公女ジネヴラを描いたものとされる。彼女は結婚して6、7年後に夫に毒殺され、この絵は死後に完成したとみられる。背後に咲いているのはおだまきの花で聖霊のシンボル、蝶々は魂の象徴とされる。袖にはエステ家の紋章が縫われている。

も服もアクセサリーも、特別に着飾っているのです。

このジネヴラの絵では、服と同じ色の花が背景にも咲いていて、きれいですね。この髪型にするには、とても時間がかかっただろうと思います。丁寧に丁寧に結ゆっていますね。当時の貴族の女性のおしゃれでしょう。凝こった髪飾りの巻き方、髪かみの結び方が注目を集めていたさまが想像されます。変わった髪飾りですが、後ろを飛んでいる蝶や花、服や表情と調和しています。

レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた『モナ・リザ』(100ページ)と比べてみてください。『モナ・リザ』は首飾りもなく、特別な髪型もしておらず、豪奢ごうしゃな髪飾りもありません。そちらのほうが当時の貴族女性の日常的な姿を描いたもので、特殊なのです。レオナルドは見合い用の「よそ行き」の姿をした女性ではなく、ふだんの姿を描きたかったのでしょう。

『若い婦人の肖像』(22ページ)の女性は首や髪を真珠が彩り、耳まで覆う透明なヴェールで髪を束ねていますね。とても変わった髪型でしょう。これまた、このおしゃれをするのといったいくらかかったのかと思うような格好です。女性の横顔の絵の中でも好きな1



アントニオ・デル・ポッライウオーロ Antonio del Pollaiuolo (1432年頃～1498年)『若い婦人の肖像』Ritratto di giovane dama (1470年代初頭。弟ピエロの作品とも言われる) ミラノ・ボルディ・ペッツォーリ美術館

ポッライウオーロは、レオナルド・ダ・ヴィンチに先駆けて人体表現のために人体解剖を行った画家・金銀細工師・彫刻家。ポッライウオーロ兄弟は15世紀中盤のフィレンツェで大工房を運営していた。



アントニオ・デル・ポツライウォーロ Antonio del Pollaiuolo (1432年頃~1498年)『若い女性の肖像』Ritratto femminile (1475年) ウフィツィ美術館

このように微笑みを浮かべた肖像画は当時まだ珍しかった。背景の青色には、聖母マリアの服を塗る際など限られた時に使われた、高価なラピスラズリがふんだんに用いられている。



アントニオ・デル・ポツライウォーロ Antonio del Pollaiuolo (1432年頃~1498年)『若い女性の肖像』Profilbildnis einer jungen Frau (1465年) ベルリン絵画館

イタリア・ルネサンスのもっとも優れた肖像画のひとつとされる。しかし1894年に発見されて以来、長年、作者についてすらはっきりしたことがわからず、しばらくはピエロ・デラ・フランチェスカ作品とも考えられていた。

枚です。可愛いですね。23ページに並べた『若い女性の肖像』と比べてみてください。

『若い女性の肖像』も身分が高い女性の結婚記念かお見合い相手に贈るものとして制作されたものでしょう。こちらはフィレンツェのウフィツィ美術館にあり、先ほどのミラノのものと同じ画家によって、比較的近い時期に描かれています。髪型や服の柄が似ていますね。つまりこういうファッションが当時流行していたということでしょう。でも比べると、このウフィツィのほうが、表情がいきいきしています。完成度はどちらもすばらしいですが、同じような服ながらもこちらは顔がやや前屈みで、何だか微笑ほほえんでいるように見えません。横向きの肖像画は、こんな風に見比べてみると楽しいのです。

右のページに掲げた『若い女性の肖像』もポツライウォーロの作品ですが、好きな絵です。よく見ると後頭部の髪と首から背中にかけての部分が平行になっていますよね。背中が曲がっている。肩甲骨だとしても、服の形だとしても、あるいは極端な猫背なのだとしても、ずいぶん出っ張っていますね。姿勢がどうなっているのか、よくわかりません。でも瞳ひとみが美しい。そして彼女は髪にはお金をかけておしゃれをしています。首飾りなどの装飾品は身につけていません。ジネヴラの肖像画のところでも言いましたが、当時の女性



ジョヴァンニ・アンブロージョ・デ・ブレディス Giovanni Ambrogio de Predis (1455年~1508年)『貴婦人の肖像』Ritratto di una dama (1490年) ミラノ・アンブロジアーナ絵画館

ブレディスはミラノで活躍したルネサンス期の画家。細密画を含む肖像画家として名声を博した。レオナルド・ダ・ヴィンチ『岩窟の聖母』（第二章参照）の制作に弟とともに携わった画家でもある。

の肖像画ではこういう人は珍しいのです。ぜいたくに着飾ることによる美しさではなく、本人自身の美しさが際立っています。

デ・ブレディスの『貴婦人の肖像』も、今見てきたポツライウオーロ作品と同じようなサイズ、同じような構図で描かれた作品です。時代は少しこちらがあとですね。比べると、これは着飾ってはいるけれども色合いは地味です。ポツライウオーロのほうが明るくて華やか、でもいずれも好きです。

先ほどのポツライウオーロの作品を所蔵しているミラノのポルデイ・ペッツォーリ美術館と本作を展示しているアンブロジーアーナ絵画館、それから有名なブレラ絵画館 (Pinacoteca di Brera) の3つは、徒歩で回れる距離にあります。

ポルデイ・ペッツォーリ美術館は、スカラ座の北東にある小ぶりな美術館で、マンテーニャやポッティチェリなどルネサンス期を中心とした美術品があります。

ミラノ・アンブロジーアーナ絵画館は1607年に創立され、1609年に世界最初の公共図書館として開館し、1618年に絵画館も開かれました。レオナルドやポッティチェリの作品、ラファエロの『アテナイの学堂』のデッサンなどを展示しています。

収蔵点数を考えても作品の質を考えても、ミラノではまずブレラ絵画館を見るべきです。なにしろルネサンス絵画ではマンテーニャ、ベツリーニ、ティントレット、ヴェロネーゼ、ピエロ・デラ・フランチェスカ、ラファエロ、ブロンズイーノ、それからその後の時代の作品についてもカラヴァッジオ、ルーベンス、セガンティーニ、モディリアーニ、モランディなど、イタリアの画家の作品が大変充実しています。ブレラはちゃんと見ようとしたら大変時間がかかりますが、ポツライウォーロの最初に紹介した肖像画とこのプレデイスの2枚を目当てにふたつの美術館をハシゴしても、1時間あれば見られます。そんな巡り方も楽しいのです。

左側のバルドヴィネッティの『黄色の服を着た婦人の肖像』も僕の好きな、女性の横顔シリーズのひとつです。この人はしつかりとした鼻で、意志が強そうな表情をしています。やはり服が特徴的です。シダ植物なのか海藻なのか、謎めいた紋章の模様に目を奪われますが、この服というかこの女性には、胸の膨らみがありません。「乳房」というより「胸板」でしょう。体付きが筋肉質な男性のようなのです。なぜこんな風に描いたのか。本当にこの女性はこんな体型だったのだろうか。想像するとおもしろいですね。



アレッシオ・バルドヴィネッティ Alesso Baldovinetti (1425年頃~1499年)『黄色の服を着た婦人の肖像』Portrait of a Lady in Yellow (1465年頃) ナショナル・ギャラリー

フィレンツェで活躍した画家による肖像画。モデルは不明。

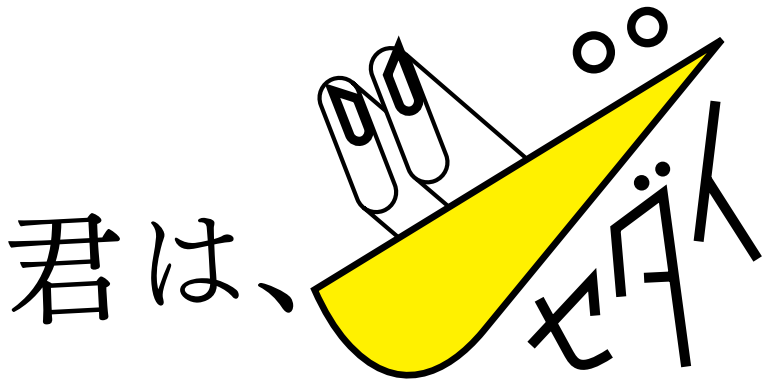


ピエロ・ディ・コジモ Piero di Cosimo (1462年頃~1521年)『シモネッタ・ヴェスプッチの肖像』
Portrait de Simonetta Vespucci (1480年~1490年頃) コンデ美術館

ピエロ・ディ・コジモは宗教画のほか古代の神話などに着想を得た幻想的な作品を多数残した、盛期ルネサンス異色の画家。本作はモデルの死から10年ほど後に描かれたもの。この絵を所蔵するコンデ美術館は、パリから40kmほど北のシャンティイ(オワーズ県)にある。主にイタリア絵画とフランス絵画からなるコレクションの持ち主オマール公アンリ・ドルレアン(国王ルイ=フィリップの息子)の遺志により、所蔵作品の貸し出しおよび展示室の一切の変更が禁止されている。展示手法は1898年の美術館開館以来変わらず、コレクションはここでしか見ることができない。

『シモネッタ・ヴェスプッチの肖像』のモデルのシモネッタ・ヴェスプッチは15、6歳でフィレンツェのマルコ・ヴェスプッチと結婚したジェノヴァの貴婦人で、ジュリアーノ・ディ・メデイチの愛人です。当時のフィレンツェで一番の美人として有名で、1476年に23歳の若さで結核によって亡くなっています。ボッティチェッリの『ヴィーナスの誕生』など、彼女の顔貌に触発されたと言われる作品もありますし、シモネッタ自身を描いたと目される絵画も何枚もあります。

その中でも、これは普通の肖像画ではないですね。髪型が奇抜ですし、裸で、しかも首には蛇が描かれています。これはシモネッタを見て描いたのではなく、想像で描かれたものだと思います。この絵の、首から下の部分を隠して見てみてください。非の打ち所がない、非常にきれいな女性として描かれています。ところが首から下は異様です。まるで首から上と、首から下で、まったく違う絵を組み合わせたかのような奇妙な絵です。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!